

## 【セッションC】

### 自治体 / 市民の取組み

味の素東海事業所 バードサンクチュアリー

味の素株式会社 東海事業所総務担当部長 坂本 優

ご紹介いただきました坂本です。今日は、私ども味の素東海事業所におけるバードサンクチュアリの活動を通しまして、四日市における市民の環境問題への取組みの一例をご紹介させていただきます。

私は立って話しておりますと緊張する性質なもので、お目ざわりかもしれませんがスクリーンの左右を動きながらお話をさせていただきます。

まず、この景色をご覧ください。スイレンに覆われた湖面、葦や夏草が茂る岸边、背後に連なる林、一見するとどこかの山の湖のようです。しかしここは鈴鹿山脈でもなければ前のセッションで講演をされた（林業家の）吉田さんの山林の中でもありません。自然がほとんど残っていないと思われている四日市のコンビナート地区に所在する工場、味の素東海事業所のバードサンクチュアリー、野鳥保護区の光景です。

味の素東海事業所は、四日市市南部の第一コンビナート地区にあります。国道 23号線という三重県を南北に縦貫する幹線道路の西に隣接し、敷地は 7 万坪、従業員約 500 名でアミノ酸とその関連製品、医薬品、「ほんだし」などの調味料を製造しています。味の素社の中では、アミノ酸関連製品の中核工場であるとともに、医薬の主力工場であり、西日本における「ほんだし」などの供給基地でもあります。周囲を三菱化学、松下電工、三菱ガス化学、JSR(日本合成ゴム)各社の大規模工場に囲まれた工場地帯の中に立地しています。先ほどご覧いただいた池は、この味の素東海事業所の東北の一角にあります。

先ほどの池は当初から残す予定だったわけではありません。しかし敷地の隅ということもあり、結果として未開発のまま残りました。創業当初、従業員にとって池は最初からある何の変哲もない大きな沼か水溜りのようなもので長いこと放置されたままでした。日照りのときなど干上がりかけたことも何回かあったそうです。

途中から、「せっかく池があるのだから」と防火用水の位置付けになりました。防火用水という位置付けにしますと、これだけ防火用水がありますということを消防署にも届けますから一定水量を維持する必要があるということで、工業用水を給水するようになりました。工

業用水といいましても、要するに木曽川から引いてきている水です。つまりは木曽川の水を補給するようになったということです。こうして水量を安定させることと並行して、ボートに係留し、岸辺に休憩用の亭屋を建てるなど、従業員の福利厚生にも活用するようになり、釣りなども楽しむ池として使われるようになりました。

その結果として河川改修が進み、周辺の水位がどんどん下がった後も干上がらずに残りました。とはいえ、7万坪の敷地の一番奥ということや、屋内運動施設などもできたこと、従業員の高齢化が進んだこともあり、最近ではほとんど利用されていないのが実態でした。周囲を散策する従業員の数は平均して1日にほんの数人で、実はそのうちの一人は私でした。

私は2年前に着任しました。ほぼ毎昼休み構内を散歩しておりましたが、特に池周辺における野鳥の種類の多さ、生息密度の高さに驚きました。野鳥は着任以来40種類以上を私なりに確認しました。魚もたくさんいて、セミヤトンボ、チョウなどの昆虫も豊富です。あまり人が行かない間に豊かな水辺の自然が形成されつつあった訳です。私なりに貴重だと感じた例をいくつかご紹介します。

これはセグロセキレイというセキレイです。似たような白黒ツトカキのセキレイは皆さんよくごらんになっていて、余りめずらしいとはお感じにならないと思います。しかし、恐らくごらんになっている多くは下のほうのハクセキレイだと思います。セグロセキレイは、空を飛ぶ鳥としてはめずらしく、日本を中心とした分布ですが、ハクセキレイは、ほとんど世界中で見られます。市街地にも多く、ここ四日市でも、私は駅の近くから中央緑地公園を抜け、天白川沿い、雨池川沿いと約3キロ歩いて工場まで通っていますが、その行き帰りの護岸や公園でよく見かけます。ですから、この池をバードサンクチュアリとして保全しようと考え、飛来する野鳥の写真を撮るようになるまでは、私自身もセグロセキレイのことを、きっとハクセキレイが来ているのだと遠くから眺めていました。

セグロセキレイが世界中でほぼ日本にしかないということは、日本の元々の自然に大変適応した野鳥だと考えられます。そのため今では日本でも河川改修など人間の手が入っていない川の上流部を中心とした分布になっていると言われています。そういう野鳥が、4月頃から11月ぐらい迄ほぼ毎日飛来しています。

池にはまた多くの魚があり、ウを始めとする水鳥が捕食に来ます。魚ではフナが一番目立つ存在です。まれに地上に落とす獲物を見ますとウも主にフナをとっているようです。3月の初め頃にはコイと見まがうようなフナが岸近くの水面に集まり産卵していました。フナは汚染にも強く本来ならめずらしい魚ではありません。しかし、最近ではブラックバスやブルーギルなど外来魚の繁殖によ

ってある程度大きな湖沼では数を急激に減らしています。そういう中で 1500 坪ほどの池でフナを中心とする魚群が維持されているというのは、むしろめずらしい位ではないかと思います。写真はフナを獲りに来たカワウです。なんとかフナをくわえている写真を撮りたかったのですが自然の生き物ですから思うとおりにはならず、ウだけの写真でご覧いただいています。

この青いトンボは「チョウトンボ」といふチョウのようにふわりと舞う姿から名づけられたと聞きました。最近はやや見られなくなったと言われますが、この池では7月から8月にかけて日常的に観察できます。実は私は沢歩きなどをする際、野鳥とともにこのチョウトンボの姿を探しておりましたが、これまで見ることはできませんでした。それがなんと工業地帯として有名な四日市に着任したら、工場の池で当たり前のように舞い飛んでいたことに驚くとともに感銘を受けた次第です。

今、具体的にご紹介した3つの例はいずれも特別にめずらしい、というものではありません。しかしそれぞれに貴重な身近の自然です。このような生き物たちを目の当たりにするうちに昨年の秋頃から

「あまり利用されていないのなら、いっそのこと人の立入りを制限して自然を復活させよう。」と考えようになりました。昼休みにすれちがう皆さんには事前に相談して了解いただいた上で、昨年12月、「バードサンクチュアリの設定」を提案しました。

味の素東海事業所は緑地率18%、この池などを含む環境施設面積は25.3%あります。1999年には環境ISO14001の認証を取得するなど環境問題への取組みは比較的進んでいます。

「バードサンクチュアリ」の提案に対し、工場長以下異論はなく

工場長からは

「名前に遜色ない実質を備えたものであること、坂本さんがいなくとも運営できる仕組みをつくること」という指示があり、

工場次長からは

「ボランティアでやれるものはボランティアでやり、従業員手づくりのバードサンクチュアリにしましょう。」という提案がありました。

お金をかけないということは「環境負荷」を軽減することにもつながり得ます。従業員に声をかけ、やれることを、やれる時間に協力してもらうこととしました。改めて知ったのは、普段行かなくとも環境的な視点から池を大切に思い、保全したいと考えていた従業員が多数いたということです。

バードサンクチュアリの設定とボランティア募集の知らせに対して、本社に転勤したOBからも新年早々次のようなメールが届きました。

「お年玉情報にワクワクしています。2002年初出勤の今日、(味の素東海バードサンクチュアリ設

定との)すばらしい情報の提供をいただき出来上がる前から感動しています。東海工場に勤務し環境を担当した一人として前々から(この池に対する)思いがありましたが実現できず時間が過ぎていました。<中略>完成を心待ちにしております。」

このようにトップからOBに至る皆さんの理解と後押しを得て従業員ボランティアによる手づくりパークサンクチュアリの整備が始まりました。

設定した「パークサンクチュアリ」の概要はこのイラストのようになっています。面積は池および周辺の緑地あわせて1万㎡ほどです。この後、写真でもご覧いただきますが、北岸は楠の外周林があり10年位前までは休憩所、スポーツ施設だった空地があります。立入りを制限したこの半年で空き地はブタクサなどの草地となりました。

東側は桜並木の外周林があり岸边にはツツジが植えられています。やはり特に手入れをせずに行くとこころちらは葎が群生しました。

南岸には立入り制限した北岸に代わる遊歩道を設置するとともに、散策する人影が鳥を驚かせないよう生垣をめぐらしました。

西岸は従来からの庭園的景観をそのまま残しています。

南岸の池沿いにあった物置はあまり使われておらず、かつ、池側に窓がありましたので半分を観察舎に改装しました。観察舎の内装工事などを除きこれらの作業のほとんどは従業員のボランティアにより行いました。

これは南岸で遊歩道を整備し始めた時の写真です。この白い看板が先ほどと同じ看板です。グラウンドの実効面積を狭くしてしまわないように、看板の裏側にこういった遊歩道をつくったわけです。歩道沿いのサツキ、ツツジ、ヒバ、タマツゲ、ユキヤナギなどは使われなくなった社宅から従業員が移植したものです。竹のベンチも従業員手づくりです。春に竹の子狩りかねて同じ社宅の竹林から切り出した竹でつくりました。25人位で竹やぶに入り、家族連れは竹の子、単身者、独身者は竹を刈り、帰りに分け合って独り者も竹の子をぶら下げて帰りました。

歩道の縁石は自宅や職場の周りから拾ってきた石やコンクリート片を並べました。

この他にもバーニング(焼き付け)によるデザインを得意とするOBによる手づくり看板の寄付もありました。

移植から根付くまでの手入れも従業員が行なってきました。私は移植の際、なるべくたくさん葉っぱが残っていたほうがいいのかと思っておりました。少しでも多く葉が残るようにして、枝も落ちないように掘ってきましたが、移したとき余り葉が多いと、弱っている根が十分な水を吸い上げられずかえって木を弱らせてしまうと、そちらに詳しい従業員が枝

を間引いてくれました。これはその写真です

これは池の南側、遊歩道の山茶花の生垣の裏側です。生垣と池の間は2mほどの間隔をとり水辺の野草が生えるにまかせました。1カ月ほどしましたらトカゲやカエルもすむようになり、そういう意味ではビオトープ的な実験といったものも期せずして行われています。

サンクチュアリの北側は工場設立後、植林された楠の並木を中心とした林になっていますが、自然に生えてきた植物も多く、最も野鳥が集まる区域になっています。空き地の部分は手入れをやめたところ、先ほど申しましたようにブタクサを中心とした夏草が茂りました。

これは東側です。桜並木があって、桜並木の池側にご覧のとおりツツジが植えてありました。こういうふうに入土手になっていますので、先ほどの北側に比べると人が入り込まなかったのですが、何も手を加えずにいたところ、どんどん葎が生え始めて、今は葎原になっています。

かつて人がたくさん歩いた場所はブタクサが生え、人が入っていない土手は葎原になり、先ほどのグラウンドの生垣の裏はいろいろな野草が茂る、こういう違いも興味深いなと思っています。それはそれで、いろいろな専門の方のお話も聞きながら自然を再生したいと考えています。

これは西岸から北岸にかけての光景です。こちらは建物もありますので庭園としての景観を残しつつ、メダカや地元のめずらしいイグサが観察できるように整備しました。そのイグサは120年ほど前に現在の工場敷地周辺で発見され、新種として認められた螺旋状のイグサで、ラセンイといいますが、今では地元でも自生地はなく幻の植物となっています。

これは観察舎の内部です。以前は野球やサッカーの道具をしまう物置でしたが雨漏りを直し、窓を上げ内装を新しくしました。双眼鏡、フィールドスコープなどを備え、壁には飛来野鳥の解説などを掲示し、また、ちょっとした打ち合わせにも使えるように丸テーブルも置いてあります。

ちなみにこの中に入れてあります机もいすも皆、工場の廃品利用です。このフィールドスコープは独身寮が廃止になったときに自治会の残ったお金で従業員が寄附してくれたもので、双眼鏡も従業員が持ち寄ったりしたものなどです。

周辺整備がほぼ終了した4月27日、東京大学大学院 / 樋口広芳教授をお迎えしてバードサンクチュアリの見学会と開設記念講演会を開催しました。その際、バードサンクチュアリとして高い評価をいただくとともに、地域の皆さん、行政関係の皆さんから大変ありがたい感謝のお言葉を多数いただきました。

手前味噌ではありますが、

「未だに残る「公害の町」というイメージや「劣悪な環境のコンビナート地帯」という先入観を、この  
バードサンクチュアリの存在自体が払拭してくれる。」

「工場の中にこのようにまとまった規模ですばらしい水辺の自然を残してくれていてありがとう」

「よくぞ企業さんが主体的に自発的につくってくれた」といった声も聞かれました。

さて、バードサンクチュアリとして皆さんに紹介する際、そもそもこの池はどのような池だったのか、  
という疑問を持ちました。そこで地元出身のベテラン従業員に聞くと「天然の池ですよ。」と教えら  
れました。隣接する自治会の方からも「昔の神社の池ですよ。」とお聞きしました。

四日市のような大都市の市街地に天然の池が残っているなら、これはこれで貴重なことです。四  
日市博物館の方にご協力いただき古い地図を調べたところ確認できた一番古い地図である昭和  
14年の地図に神社のマークと池などを示す輪郭があり、少なくとも60年前から池があったこと、そ  
の池は、かつて地域の方々が白龍さん（水の神）の池として大切にしていた池であることがわかり  
ました。昔の地図ですので、今の地図と合わせましても道も水路も変わっています。本当にこ  
こかなというのは素人ではなかなかわかりませんが、学芸員の方、あるいは工場ができる  
前から水田をお持ちだった方など、工場に来てくださり、

「これは確かに昔の白龍さんの池です」と確認していただきました。

また、池の周囲は水田や湿地で大雨が降ると一面池のようになることから雨池と呼ばれそれが地  
名にもなったということもわかりました。

豊かな水辺の自然がある、というだけでなく地域のかつての自然環境の名残を留めるものとしても  
価値ある池だということがわかりました。

こういった池の由来から、バードサンクチュアリに来場いただいた皆さんには野鳥観察のほか、  
このようなこともご説明しています。すなわち、

- ・ 以前周辺は湿地でこの池の水面とほぼ同じ高さまで水が来ていた。
- ・ 雨が降ると大きな池のようになることから雨池という地名ができた。
- ・ 伊勢湾台風などでは大きな被害を受けた。
- ・ 河川改修により水はけがよくなり、洪水には強くなったが湿地は干上がった。
- ・ この池は昔の湿地の名残である。
- ・ 雨池地区は公害被害の大きい所だったがこのバードサンクチュアリにも見られるように環境  
は徐々に改善されてきた。

いわば地域の歴史を語る題材ともなっている訳です。

「池」と呼んでいたときは利用度の低い寂しい池でした。しかし「バードサンクチュアリ」として見

たときはそれが幸いし、専門の方にも高く評価していただけるものができました。貴重な水辺の生態系を形成、再生、保全するとともに、野鳥や昆虫などの観察の場として活用されています。

また、バードサンクチュアリの取組みを通じて池の由来を知り、郷土の自然環境の変化を伝える題材としても活用されています。福利厚生用として見たときの「遊休資産」が、呼び方、見方を変えることで、ほとんどお金をかけずに環境資産として得がたい「優良資産」に様変わりしました。

バードサンクチュアリ整備に取組み始めた頃、工場としての緑化施策の一環とか、食品、医薬品を製造する工場としてのイメージ向上という思いがかなりの程度ありました。今もないわけではありません。しかし今述べましたように、取組みを通して地域の環境資産としての池の価値を知るに及び、一企業の緑化率とか、企業イメージということではなく「社会の公器」として地域の環境資産をお預かりしている責任というものを強く認識するようになりました。

企業市民としてここ四日市で事業活動を行なっていく味の素東海事業所にとって、このような意識の変化が知らず知らずのうちに従業員一人ひとりに浸透しつつあるのは、社会との共生という面においても今回の取組みの大きな成果だろうと考えております。また、こういう意識そのものが「心の環境資産」として将来に生きるだろうと思います。

四日市市は既に 1995 年に国連環境計画 (UNEP) から公害を克服した都市として表彰され、公害防止技術を世界に移転している町としても知られています。これに加えて、コンビナート地区の工場の中にもバードサンクチュアリがある自然豊かな都市であることを是非記憶に留めていただきたいと思います。

さて、先ほど申し上げましたように、工場長に「バードサンクチュアリをつくりたい。」とお話ししたときに言われたのは、まず

「バードサンクチュアリという名前に負けない、名前に遜色のないものをつくってください」。次に、

「坂本さんがいなくなっても、そのまま運営できるものにしておいてください」という二つでした。ハード面ではご説明したように既に野鳥が 40 種類以上来ているなど豊かな自然がある、そして人の姿が見えないようにして観察小屋を通じて観察するように施設を整備しました。ソフト面についていいますと、地域の歴史の題材にもなるということから、実は退職したOBの皆さんにご協力をお願いし快く引き受けていただいたんですが、土曜日の「ゆとりの時間」などでOBボランティアが子供たちに地域の歴史を語る場所として活用していくことが計画されています。

今も子供たちが工場見学に来たときに希望があれば案内していますが、昔の湿地の名残、

あるいは環境改善の実態を目の当たりにすることができます。また、昔の地理や四日市公害の話などは地元OBでしたら自分の経験から自分の言葉で語れます。子供たちが多分そういう話だけではあきてしまうでしょうが、そういう時に話を振る位の位置付けで野鳥も観察する。よく見かける数種類については覚えていただきますが、それ以外は飛来した野鳥の写真が張ってありますから、「この中のどれでしょう。」と子供たちに見てもらい、そんな形で運営していきたいと思っています。

「バードサンクチュアリを工場の中につくりましょう。」という、考えてみれば突拍子もない提案に対してトップから、ベテラン、若手あるいは工場を離れた人にまでバックアップしていただき、このようなご報告をさせていただけるまでに整備できたことに感謝しつつ、最後に改めて、味の素東海バードサンクチュアリの四季をご覧ください。

これは2月、四日市で今年一番の大雪が降った日の池の光景です。ただずんでいるのはアオサギを中心としたサギ類です。画面の隅にカルガモなども見えます。

これは春です。ほとんど似たような場所ですが、冬と違って緑がしたたるように優しくみえます。スイレンも葉を広げ始めています。サギの背後の紫の花はマツバウンランという、最近西日本で急激に数をふやしている帰化植物です。

これは夏、スイレンの葉が大きくせり上がってきて、全体が明るいので目立ちませんがピンクの花が咲いています。こちらは夏の岸辺です。先ほどごらんいただいた冬の写真と同じ場所ですが、ブタクサなどの夏草が荒々しいぐらいに茂ってきています。

これは秋です。画面の左下のほうにヒガンバナが咲いています。冬や夏の写真と同じような場所ですが、季節の移り変わりとともにこのように風景が違っていきます。

これは季節が戻って今年の春先です。3月初めぐらいでした。たくさん鳥が来ていたので、何とかその様子を写真に撮りたいということで近づいたら鳥が驚いて飛び立ってしまったという光景です。このとき写真を撮った従業員の話では、数えていたらサギ類で35羽いて、ウが、画面の下あたりで1羽まさに飛び立とうとしていますが、10数羽、カモ類も画面の右側のほう、細かいですが、この右側にはホシハジロとかハシビロガモといったシベリアから渡ってきたカモ、画面の左のほうには一年中いる留鳥のカルガモが映っていますが、こういったカモ類も30羽近くいたようです。ここにはそこまでは写っていませんが、目についただけでも70羽ぐらいの野鳥がいたことになります。ちなみに、この従業員は鷹栖（タカノス）さんというんですが、それは鷹が出ていけば鳥は逃げるだろうと。(笑)

こんな形で一斉に飛び立ってしまった訳です。

今後ともこの写真のように豊かな自然を守り、社会や地域に貢献していくべく、バードサンクチュアリを充実させていきたいと念願しております。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

(終了)